

child, for every child, for every child, for every child,

「for every child (すべての子どものために)」は、現在ユニセフが全世界共通で使っているキャッチフレーズです。各界で活躍されている方の「子ども時代」を振り返っていただきながら、世界中のすべての子ども、一人ひとりの子どもたちにとって必要なことは何かを考えていく連載企画「for every child.」。第4回は「女は家事」が当たり前だった時代に、官僚や関係の立場で女性の社会的地位の向上を目指し、前例にとらわれることなく社会の改革を押し進めて来た、当協会の赤松良子会長です。

すべての子どもに必要なと思うことは、

愛です。

赤松良子 日本ユニセフ協会会長



あかまつりょうこ
大府府出身。1953年東京大学卒業。同年、労働省入省。1979-82年国連代表部公使（ヨーロッパ）、1983-86年労働省婦人局長。1985年に男女雇用機会均等法を成立させた中心人物。1986-89年駐ワシントン大使。1993-94年文部大臣。2003年、旭日大綬章授章。2008年6月より、公益財団法人 日本ユニセフ協会会長。

for every child,

すべての子どものために

for every child,

子

ども時代の私は本当におてんばで、いたずらが大好きな女の子でした。芸術家だった父は自由な感性を持っており、当時の女性観などの世間の枠組みに私を当てはめることなく育ててくれました。年を重ねてから生まれた末娘の私をとてまわいがあってくれ、あまり此れられた記憶はありません。母は大変聡明な女性でしたが、貧しきや時代の常識も

あって学業を続けることができませんでした。娘にほのぼのとした悲しい想いをさせたくない一心で、教育の大切さを繰り返し言い聞かせる母の複雑な気持ちを幼心にも感じ取ってしまいました。で、私も一種奮闘強を続けました。ですから、戦後に女性への門戸が開かれたばかりの東京大学へ進学を志した際も、両親全面的に後押ししてくれました。自由で困った子だ、と内心

呆れていたのか分りませんが、新しいことに挑戦する不安よりも夢を追って前へ進みたい気持ちが勝つてしまいう性格をうまく理解してくれていたのだと思います。故郷の大阪から上京する時、自分たちの寂しさは見ず快く見送ってくれた両親の表情は、今でも心に残っています。

両親は、世間の常識にはとらわれずやりたいことは何でも挑戦させてくれましたが、当時はとて遠い女性に對して非常な差別的な時代でした。「この家は、かまごの下の子の灰まで俺のものだ」と家督を継ぐ長男が幼い私に威張っていたのを見ています。伸び伸び育ててくれた自分と異なる性格の私は、兄弟であっても自分と対等の立場だと思っていたため、その言葉をとても悔しく聞いていました。――「負けるもんか」。この時芽生えた小さな反発心が社会を改革したいという想いを繋がり、後に「男女雇用機会均等法」を押し進める私の原動力のひとつとなったように感じています。



7歳上の姉と写る赤松会長(写真:本人提供)

米寿を迎え、これまで時代が大きく移りゆくさまを見ましたが、普通のなまのまに存在します。そのひとつは、子どもへの無償の「愛」。私が今日ここにあるのも、幸いにも子ども時代、私をひとり一人として尊重してくれたおとなが近くにいるから。これはその様な恵まれた環境にいない子どもがその様な恵みを受け、これからは日本ユニセフ協会の仕事を通じて、子どもが子どもらしく過こせ、持っている可能性を十分に伸ばせるよう「愛」を届けるお手伝いを続けています。